

境内の冬樹の枝に止まっていた小鳥が、

私がちよつと傍視をして間に、音もたてずにいなくなりました。

枯れ尽くしたカエデや寒さに耐える松の枝が濃く、落葉の庭に映っています。

静かな日和です。

檀信徒の皆様にはお変わりございませんか。

今もつてコロナの感染者数が新聞の紙面に載る昨今、インフルエンザがそれにも増して、勢いづいています。



マスク、そして手洗い・うがいの励行、怠りなく続けたいものです。

池上にある眼蔵寺の住職をしていました、

私の弟が、十月廿一日、七十六才で亡く

てはならぬ存在でありました。父が亡くなり、兄弟で同じ教区内の寺院の住職となつた頃、お坊さん達の集まりで、「たとえ、兄貴が間違つた意見を言つたとしても、その場では、自分は兄貴の意見を決して否定はしないヨ。何があつても援護するつもりだ」と言つてくれたことがありました。

池上と多古——歩いて二十分位の所に住む兄弟でも、常々、何かの行事でもない限り、余り顔を合わせることがなかつたとはいえ、何かあつたら駆けつけ、助け合うという暗黙の了解の上に私達は安住していました。

六月に食道ガンがみつかり、延命治療はしないと宣言した弟を、その家族は、静かに見守り、病人のわがままにつき合いつつ、より添つて暮らしてくれました。余命が切られていく日々の中で、では、私

なりました。

祖父が火箸で火鉢の端を叩きながら、お経を唱え、弟と二人で並んで声を合わせて復唱した幼い日の想い出をかわきりに、弟との思い出は尽きません。

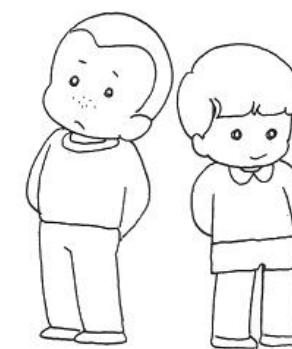
病んだ祖父を看

る為、両親は玉宝寺に移り住み、父は教職と檀務の忙しい日々を送つておりました。

私達（姉、私、

弟の三人）は、それまで家族で住んでいた池上の眼蔵寺を、あき寺にするわけにいかず、子供達だけで住むことになりました。

幼い頃から、父に僧侶になる為に、いろいろなことを仕込まれた私と違い、弟は全くの自由人であります。しかしそんな弟も、姉が嫁いでからは特に、私にとつて、なく

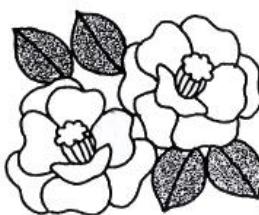


は何をしてあげたらよいのか、随分悩みました。点滴の他に、わずかな流動食が口にできるならと、甘味の少ない、喉に優しいアイスクリームやステップの類を取り寄せて持つて行つたり、痩せ細くなつた脚をさすることだけしか、弟に寄り添えない自分をもどかしく、悲しく思つたりしましたが、亡くなる直前に、

「兄貴と○○（奥さんの名前）がいたから、幸せだった」との言葉をもらい、私も、

「また、（来世で）会おうナ！」と声掛けが出来、淋しいけれど、弟をしつかり父母の元へ見送れたとの想いで、今はいられます。

それにつけても、私が生を受け、この世に生かされた年月を考えてみると、あつという間で、ついこの間まで棒を持って飛び回り、



且つ走りまわっていた自分が、こうして一山の住持をつとめているということ・・・十年一昔といいますが、まさに夢のような早さで時は通過していると、つくづく思います。

順当に生きて、あと何年・・・？

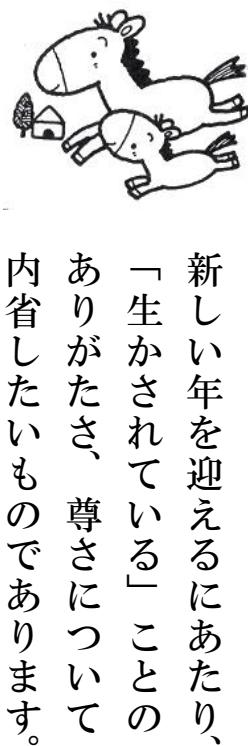
笑つて毎日を過ごしても、涙を流して過

ごしても、一生は一生。

憎しみの心をいだいても、愛の心をいだいて穩かに暮らしても、一生は一生。かわらないのであります。

痛切に思います。

日々、一刻一刻を大切にしたいものだと。



人は唯一一人では生きられない多くの人は物にささえられ生かされていることによつて生きている
その恩に報いる唯一の道は人を生かし物を生かすことである

お寺から

十一月十三日、客殿の棟上式をとり行いました。長い間、檀信徒の皆様には、プレハブ小屋を客殿かわりの御使用で、大変御不便をおかけしました。
もう少しの辛棒です。

皆さんのが集い合える場所が完成するのを私も、楽しみにしています。

尚、後日詳細はお札の御希望を伺うハガキと共にお伝えしますが、大般若会の開始時間が午後二時に変更となりました。
御承知おき下さい。
